

2024 年度

地域の子ども研究会

地域の子ども研究会目的『地域の子どもたちと共に成長しよう』

年間テーマ『地域に踏み出す一歩目を～今と未来に子どもの笑顔を～』

目次

研究活動の報告

- 睡眠障害研究について 2
- 共に子育てをサポートできるように～ケースから考える～ 4
- からだの性・こころの性 11

各担当の報告

- 情報交換・あそびについて 21
- 施設間交流について 22
- 中学生以上活動について 23
- 研究会内研修について 24
- 児童部会について 26

行事の報告

- ともだちドッジボール大会 28
- ともだちフェスティバル・ともティバル 30

個人の振り返り 31～42

研究活動の報告

研究活動「睡眠障害研究について」

参加メンバー

長居子どもの家：大城 楓恋
平和の子どもの家：齋藤 千明
愛染橋児童館学童クラブ：細川 海晃
育徳園子どもの家：高角 拓実
阿さひ保育園つくし会：木野 伸哉

① 研究に至る理由

現代社会において子どもたちの不眠・不登校問題が露わになり、なぜそのようなケースが増えているのか、家庭内や学校での過ごし方や関係性、あそびの変化等を学び子どもと家庭に還元できるように研究に取り組んだ。

② 原因と背景

ある学童クラブで睡眠障害の疑いのある児童が2名挙がる。各家庭状況を確認したところ幾つかの共通点が挙がった。1つめは保護者が対応に困っている状態にあったこと。もう1つはスマートフォンやゲーム機の時間制限がないこと。3つめは家庭的な要因であった。

Aさんは朝起きられないことが多くほぼ毎日遅刻して登校している。それについて母親は起こす等するが間に合うよう催促はせずAは二度寝をしている。また、父親が在宅であるが保護者同士の関係性が良くなくその場では関わっていない。しばらくして父親が学校へ行くように促し登校する。朝に起きられない理由として、深夜遅くまでスマートフォンを使って動画(TikTok)を視聴したり、ゲームをしたりしている。

Bさんは登校時間がギリギリであること、午前授業中に寝ていることが挙げられた。家庭環境に問題はないように見える。父親の職業が夜勤であること、母親が夜遅くに帰ることから学童から家へ帰るまで(学童を出た後は近くの父親の勤務先へ)の時間が遅く必然的に就寝時間が遅くなる。また帰宅後にゲームをし、保護者が注意をすると癇癢を起し手が付けられなくなることであった。

③ 与える影響

このように2名の児童の共通点は、保護者と子どもとの関係性が2者関係だけになり他者への相談がうまくできない、スマートフォンやゲーム機の使用、家庭的な要因であることがわかる。まず家庭での親子関係はどうか、上記を踏まえて幾つか例を挙げてみると「子どもが落ち着かない、騒ぐ、怒る等を抑制するためにゲーム機やスマートフォンを与えざるを得ない」「子どもが落ち着き親は手を掛けなくて済む」「甘やかしすぎているように見える」等。子どもの立場からすると、こう言えば(こうすれば)スマートフォン、ゲームが出来る、好きなことが出来る、わがままを聞いてもらえる。それらが容易に許されると子どもは学び何度も繰り返し親子関

係に深まりが見られないと考える。実際に起きている上記の2名の児童はやはり親子関係に少し問題があり、夜遅くまで起きて好きなことしている。そして朝起きられずに遅刻、授業中の睡眠等の問題が頻繁に起きていると対象の児童本人たちも話している。

④ ショートスリーパー

学童期の発達において睡眠時間は必要かどうかを調べた。その中で興味深いことに「ショートスリーパー」という単語が現れる。ショートスリーパーとは短い睡眠時間（1日3時間～4時間程度）でありながら体に大きな影響を及ぼさずに効率的に過ごせる人々をさしていた。大人ではよく聞く言葉かもしれないが、児童にもいるのか調べるきっかけとなる。しかしながら対象の児童は極端に短い睡眠時間ではなかった。また、Aに関しては短時間で目が覚めてしまい何度も睡眠をとるといった児童であった。熟睡が出来ないところをみるとほかに要因があるのではないかと考えられる。

⑤ まとめ・見解

今回睡眠に関する研究を行った中で睡眠障害とは本人だけの問題ではなく家庭や生活習慣などの本人以外の問題も大きくかかわっていることが考えられる。特に昨今のスマートフォンの普及で深夜まで起きていて十分な睡眠時間が取れないことや、睡眠の質の低下で日中に眠ってしまうというような原因になっている。また、家庭でも放任主義という言葉が挙がっていたが、それだけではなくシングル家庭で多忙の中子育てをしていて子どもにまで手が回らないなどの場合もこの問題に直面する可能性がある。睡眠だけではなく家庭の経済状況や、保護者の疾病など子どもたちを取り巻く様々な問題の中に睡眠障害があると考えられる。睡眠だけではなく生活習慣を改善するには、短期間ではなく長期に渡って少しずつ改善していかなければならない。子どもたちの生活の中に学童という居場所があるのであれば、子どもや保護者とじっくり会話し、信頼関係を築き、支援を行うことで少しでも睡眠の悩みがある子どもたちへの改善に貢献したいと考える。

研究活動「共に子育てをサポートできるように～ケースから考える～」

参加メンバー

やまと保育園子どもの家：笹井 唯衣

今池こどもの家：山田 夢果

今川学園子どもの家：西岡 亮(年度途中から)

研究活動に至った経緯

- 施設だけでは子育て支援に限界があると感じている。保護者との連携を強化し、共に子どもの成長をサポートすることで、子どもも保護者も育ちや子育てをより楽しめる環境を作りたいと考えているため。
- 虐待に関する報道増加や、自施設での気になる事例を経験し、知識不足から相談対応や窓口の一本化に課題を感じたため。

研究活動の目標

- 被虐待児の心理ケアを探る
- 保育者にできることとは

研究の進め方

1. 虐待についての理解を深める

『児童虐待について』

○身体的虐待

- 保護者が子どもに殴る、蹴る、水風呂や熱湯の風呂に沈める、カッターで切る、アイロンを押し付ける、首を絞める、やけどをさせる、ベランダにさかずりにする、異物を飲み込ませる、厳冬期など戸外に締め出すなどの暴行を指す。子どもは打撲や骨折、頭部の外傷、火傷、切り傷などを負い死に至ることもある。周囲からは分かりやすいが、洋服の下の見えない部分にだけ暴行を加え気付かれないようにする場合もある。様子がおかしいと感じた時には着替えをするタイミングで確認する。

○性的虐待

- 子どもへの性交や性的な行為の強要、教唆、子どもに性器や性交をしている姿を見せることがあげられる。本人が告白するか家族が気付かないと顕在化しない。実父や義父から「お母さんに話したら殺す」と暴力や脅しで口止めされているケースもある。開始年齢が早いと子どもは性的虐待だと理解できない事がある。実母や義母から男の子に対してもある。

○心理的虐待

- 大声や脅しなどで恐怖に陥れたり、無視や拒否的な態度を取ったりする。きょうだい間で差別を行う。自尊心を傷付ける言葉を繰り返し使う。家族に対し暴力や暴言を子どもに見せること。子どもの心を死なせてしまうような虐待。

○ネグレクト

- 保護者が子どもを家に残して外出する、食事を与えない、衣服を着替えさせない、登校禁止にして家に閉じ込める、無視して子どもの情緒的な欲求に応えない、育児知識が不足していてミルクの量が不適切、パチンコに熱中して子どもを自動車内に放置する。乳幼児や年齢の低い子どもに起こりやすく安全や健康への配慮が著しく欠けたために子どもが死に至るケースもある。病気なのに病院に連れて行かない医療ネグレクトもある。

参考文献：子ども虐待防止「オレンジリボン運動」

2. 虐待当事者視点で考える

「虐待」を犯罪行為として切り離し、善悪を決めていくだけではなく、誰もがその当事者になりえること、自らの行動が虐待に連鎖しているかもしれないこと等を感じられるように、今置かれている「保育者」としての視点だけではなく、虐待を行っている、受けている、見ている等当事者の視点、また隣人や第三者等客観的な視点等、多角的に考える。

タイトル	母にとって、子宮(孤独)からの脱出
背景	映画『子宮に沈める』(大阪二児放置死(餓死)事件をもとにした映画である) 主人公は専業主婦の由希子。世間で言われるような家庭的な母親で、家事や育児にも専念していた。子どもたちの、表情や言葉をよく見ながら寄り添い、たくさん話しかけ、丁寧な関わりをしていた。夫との離別を機に、仕事をしながら、娘の幸(3歳)と息子の蒼空(1歳9か月)、幼い子どもたちの子育てを独りですることとなる。 はじめは、資格取得のために勉強をするなど頑張っていたが、子育てをしながらの勉強や仕事がうまくいかなかった。しばらくして、友達のすすめもあったからか、夜の仕事に就く。夜遅くまで帰らなかつたり、夜に男性を家に連れてきたり、次第に生活は荒れ、育児放棄するようになった。 そして、由希子は子どもたちが家から出ないようにして、家を出ていき放置した。帰らない間に、蒼空は衰弱死。部屋のを漁り生きながら耐えていた幸も、由希子の手で溺死させられた。 映画には出てこなかったが、元となる大阪二児放置死事件の母親は、子どもの頃、親からの育児放棄を受け育ったようだ。
エピソード(記録者：山田夢果)	◎夜に、約束をしていた高校時代の友人恵子が家に遊びに来た時のエピソードである。 恵子は約束の時間より遅れて、訪問。インターホンのチャイムが鳴るも、資格取得のために編み物をしていた由希子は丁寧に編み物をたたみ片付けた。10秒後に再度チャイムが鳴り、開いていた教科書はそのままに、急ぎ足でドアを開けに行った。恵子は、由希子に会えた喜びを声色で伝えようとしているのか、初めからテンションが高いように見えた。恵子が遅くなったことに軽く謝罪を入れると「子どもたちも寝たところだからちょうどよかった」と優しく返事をするも、恵子は空返事でカバンを雑に蒼空のベビーチェアの上に置き、携帯はダイニングテーブルの上に置く。 恵子は由希子よりも先にダイニングの椅子に座るなり、すぐに机の上の閉じていた教科書を手にとった。そして、目に留めることなく適当にパラパラめくりながら『なにに、勉強してんの?!』と驚きながらも高い声で聞いた。由希子はすぐ、恵子に駆け寄り、表情は満面の笑みで「うん、資格でもとろっかな」と恵子の目を見て言いながら、恵子の持つ開いた教科書を両手で持ち、閉じさせながら自分の手元に回収する。恵子は興味津々のように『なんでなんで』と体を前のめりにして聞くと、由希子は表情を保ちながら下を向き、首を横に振り、そのほかの教材道具を真顔で片付ける。 恵子は、そんな由希子の様子は見ず、誰かが居ないのかを確認するよう部屋を少し見渡し『ってかさ、夜やれば?』と、提案する。由希子は無言で恵子の顔を見るも、自分の働いている夜の店の子の話の思い出なのか、唐突に話を変え、話した。その後タバコを吸いながら、有名人と知り合いが飲みに行ったはなし、紹介されて会ったはなし、愚痴等を、時折携帯も見ながら自分のペースで話していた。由希子は声を発することなく、頷いたり、恵子が視線を合わせてくるときに合わせて、微笑んだりしながら聴くようにしていた。話の途中でベビーチェアの上に置かれた恵子のカバンが目にとまり、見つめる様子があった。 恵子の話の途中で蒼空の泣き声が聞こえた。顔を蒼空のいる寝室に向け気にするも、恵子の話を継続して聞く。5秒後に先ほどよりも大きな蒼空の泣き声が聞こえ、恵子に何も言わず急いで蒼空の元に行く。その間も恵子は座り話し続ける。 由希子は蒼空を抱っこし、ダイニングの椅子で、「ばあ」と言い合っていた。恵子は、そんな二人を構うことなく、煙草を吸いながら噂話をし、それが終わると煙草を手を持ったまま、恵子に前向き抱っこをされ、ミルクを飲もうとしている蒼空に近付いた。蒼空はのけ反りながら声を出し泣き始めた。それを見ながら『かわいい、私も子どもほしいな〜』と言った恵子を一瞬見た由希子は、「ハハハ」とひきつった笑いを浮かべながらもすぐ、蒼空に視線を戻す。すぐに煙草を一吸いする恵子を二度見するのを見るも、再度蒼空に視線を戻し対面抱っこに向きを変え、あやしながら「恵子、彼氏は?」と話を振った。蒼空の背中をやさしくトントンと叩きながら、恵子の自分はいい母親になると思うという話に、愛想笑いで返す。恵子の携帯が鳴り、嬉しそうに話したあと、電話相手から呼び出されたようで、すぐに煙草の火を消し帰った。
考察(映画全体を見て 記録者：西岡)	現代社会の「母親の孤立」「貧困」「家庭崩壊」がテーマになっており、実話を模した映画となっている。フィクションではなく社会問題に対する鋭い問題提起を含んでいる。映画で描かれる母親・由希子の行動は、社会的支援が欠如した環境に置かれた結果で、一方的な非難ではなく、「なぜ彼女はそこまで追い詰められたのか」を考えさせられる。 映画のラストシーンの「赤い糸」がキーワードとなっており、自分自身「母と子の繋がり」は途絶えないものではないかと考察する。ラスト、由希子が窓の外を静かに眺める姿のシーンはリアリティーがあり視聴者のいろんな考えを連想させる場面だと思った。 考察(このエピソードより 記録者：笹井) 父親と離別したが、「良い母親でいたい」と言った思いが強くあり、資格を取ろうとしたり、子どもたちのために編み物を行って来ていたように感じる。友人の恵子が「かわいい、私も子どもほしいな〜」と言い、母親がひきつった笑みを浮かべたのは、子どもたちは可愛い自分の時間が無かったり、育児の疲れや大変さ、周りに頼る事もできないこともあり、表情に出ていたのではないかと。電話で話した相手に呼び出されて帰ったり、恵子は自由で楽しそうに過ごしているのに由希子は時間にも行動にも制限があり少しずつ子どもも自分の時間になり、虐待(育児放棄)に繋がったのではないかと感じた。

3. ケースの観察 そこから観えるもの 保育者としてできることは何かを見出す

エピソード①「甘える姿」

下校後宿題が終わると必ず指導員の元いき、「抱っこして」「おんぶして」と言ったり、指導員の足元で寝転がりひつつくように甘えたりする姿が多く見られる。日によって甘える職員が違ってくることもある。その日の最初に関わりをもった職員や年上児と過ごすことを望むようで、「下に降りるから〇〇先生と待ってて！すぐに戻って来るから」と話をしても嫌がる姿がある。また、室内ではなく戸外で遊ぶとなっても「屋上行ったら〇〇しような」と先に約束をしてから戸外に出る準備を始める。

☆なぜ、甘えるのか

- ・安心と安全な関係を求める。

⇒イコール、認められたいという思い。また、愛着関係を求めている、欠落しているものが多いのではないか。反対に、相手への期待はまだある。

- ・愛着の臨時基地としての施設。

⇒母に甘えたい（受け止められたい）という思いを「泣く」という行動で表現する

- ・母への依存

⇒アタッチメントを形成していく中で相互の求める関わりや思いにずれがあったのかもしれない。

☆保育者としてできること

《子どもに対して》

- ・子どもの甘えたいという気持ちをまずは全面的に受け入れる保育者を一人設ける。（アタッチメントの形成・無条件の愛）
- ・保育者は、子どもの臨時の安全基地としての役割を果たす。それを軸にして、『本当は母が良かった』気持ちを受けとめる。決して母の自己責任として責めることなく家庭と関わる。そのようにすることで、家庭と連携を図りながら協力した子育てサポートを目指すことができるのではないか。

《保護者に対して》

- ・保護者に対して、言葉にできず「泣く」姿を子どもの発達と共に話し、互いの気持ちを伝えあうためにも「待つ」という手段など適切な関わりや方法に保護者自らが気づくことへの伴奏を行う。（育児相談）

エピソード②「盗癖が疑われたケース」

ある施設で物(シール)が不自然になくなるということが続いて起こった。その時間帯に来館している子どもたちにシールが無くなっていることを伝えると、ある子どもの表情が曇ったように感じた。数日経った頃、ある子どもがなくなっていたシールを指導員のポケットにそっと入れてきたため話を聞くと自分が盗ったということは認めしたが、どうしてそのような行動になったのかななどを語ることはなかった。

☆物を盗るという行動の背景を考える

- ・十分に必要なものを与えてこられなかった
- ・ほしいという気持ちを言えない、衝動を抑えることができない
- ・なんらかの満たされない気持ちを、物を盗るという行動で埋めようとする
- ・学童施設という環境下で自分を見てくれないという不安感があった
- ・スリル
- ・友だちが物を自慢していて、それを見ている子が喜んでいる姿を見た。自らも同じものを持って、見せることで相手に喜んでほしいと思った。
- ・物への執着心が無い(無関心)
- ・あったからとった

☆保育者としてできること

《子どもに対して》

- ・子どもにとっての事実に関心を寄せ信じる姿を見せ続ける
- ・事前：日常的な関わりを大切に「この人を傷つけない」「大切」と思われるような関わりを意識する。またモデリングされる立場として人や物を大切に思う気持ちを表現する。
- ・事後：「待つ」姿勢を大切にしたり関わりにより自らの行動を振り返り考える機会を設ける
→ネガティブな出来事であっても「言える人(ストレスからの解放)」として認められるようなアフターフォローをする。

⇒これらを繰り返すことで、健康的な方法で自らの気持ちが満たされる方法やアプローチ方法を習得するよう支援する。

《保護者に対して》

- ・感情だけで物事を考え、今ある姿のみを考えるだけではなく、物事の背景や今後の見通し等も立てられるように、まずは「物を盗る」という事実のみに焦点を当て、話す。幼さからくる好奇心や欲求から物をとるような発達段階のこと、満たされていない気持ちからくる心理的なもの、ストレス等からくる衝動的なもの…等、様々な要因があることを伝え、その子の今やこれまでを共に考えられるよう話を進める。

《その他》

- ・『ばれへんねや』といったような二次的な影響の広がりには留意する。
- ・第三者の目に留意する。「見ていた」ことのストレス等。

⇒正義感の確立段階、モラル形成のための社会経験を培っている子どもたちであることを意識し、善悪だけで判断し、示すのではなくそこにいる子どもとともに話し合いながら物や人の大切さを

話し合っていけるようにすることがたいせつなのではないか。

- 職員間で進み方を考える、現在の学童施設の環境を共有しながら課題を見つける

☆エピソード①②で共通すること

- 「愛着を持った執着心」がないように感じた。一見、甘えたり盗んだりする姿は、求めているような執着心があるようだが、このケースの場合は「何(誰)でもいいから」という部分が垣間みえる。
- 家でしたいこと(甘えたい、モノが欲しい)を学童でしている、満たそうとしている

4. 研究会全体でのロールプレイ

研究会のメンバー全員が参加型でロールプレイを行い、このシチュエーションはどの虐待に当てはまるのか、こんな保育が実際にあった場合どのように行動するのかを考えた。

ロールプレイ① テーマ【偏食で食べられるものが少ない園児がいた】

その日は八宝菜ラーメンで豚肉、白菜、にんじん、きくらげ、ちんげんさいが入っていた。

子ども : **お肉いやーやこれもこれもいやー(肉と野菜を指差して嫌がる)**

保育者 1: じゃあ今から取るから待っててね

保育者 1: 全部取れたからどうぞ。食べてね!

子ども : **いやーやこれまだある(小さい野菜見つける)**

保育者 1: もお! もうこんなちっこいねんからたべーや

子ども : **いやーやいらん**

保育者 1: はいはい、もう全部取りました! ラーメンしかないから食べられるよね?

子ども : **納得して食べ始める**

保育者 1: 他の子はみんなちゃんと全部食べるのにどうして〇〇くんは食べられないかね? いつになったら食べれるようになる?

子ども : **何も答えずラーメンを食べる**

保育者 1: いやいやしてる時間長かったんやからもうご馳走様の時間くるからね。ご馳走様の時間きたら終わりだからね。だから最初から食べてたら良かったのに

②役割

1 年目…大西・高角/9 年目…笹井/10 年目…山田/ベテランパート…横山/保護者…大城/
管理職…木野/子ども…山田

③10月18日(金)に実施

④反省や気づき

- 最初の保育士と子どもの関わりを全員に見てもらい、それぞれの役割で考え実践してもらったが、そのスポットごとでやり取りを進めるのではなく、様々な箇所でも各々の役割をはたしていたことにより、あまり全体の流れや対応の仕方が分からなかった。
- 今回はベテラン保育士が保育士 1 と子どもの関わりを見て子どもに寄り添った言葉掛けを言っていたので、子どもに対して行動することの大切さを改めて感じた。
- 言葉を上手に話すことができる年齢であれば、「〇〇が嫌だった」と伝えることができるが、そうでない年齢の場合他の職員からのケアも難しくなってくるのではないかと感じた。

- ・保育士 1 と子どもの関わりを見て 1 年目の先生は良くない事だと分かっている先輩に声をあげにくいので、ベテラン保育士のように心のケアは難しいと感じる。
- ・食の楽しみを覚えていく発達段階に、保育者が思う食べ方を配慮なく子どもに伝えたり、周りと比較ながらその子どもの価値を下げたりするような保育、給食対応は、子どもに心理的な負荷を与えているのではないかと感じた。その為、心理的な虐待に当てはまる可能性もあるのではないかと感じた。

ロールプレイ② テーマ【帰りたくない子ども】

保護者:(仕事が終わりに迎えに来る)

指導員:おかえりなさい。〇〇ちゃんお迎え来てくれたよ

子ども:**嫌や帰りたくない**

保護者:〇〇ちゃんきょうは帰るよ早く準備して

子ども:**嫌や。まだ帰りたくないねん**

指導員:今日は帰りたくないんか～。お母さん後どれくらいなら時間ありますか？

保護者:もう 20 分くらい待ってるし、いつも私は待たされてばかりなんやからもう帰りたいやけど。もう〇〇ちゃんそんなに帰りたくないなら保育園に残り

②役割

保護者…山田/指導員…西岡/子ども…笹井

③3月14日(金)に実施

④反省や気づき

- ・指導員としてどのように対応すべきなのか、どのように声を掛けるのかが難しかった。
- ・遊びが途中である場合もあるので、どのような帰りたくないのか見極める必要がある。
- ・どうして帰りたくないのかを子どもと指導員で話をする時間を作ることでなぜなのかを知ることができると感じた。
- ・待っているこの時間に保護者とのコミュニケーションを取ってもよいのではないか。
- ・保護者目線ではいつも待っている自分ばかり待たされているとなり、育児のしんどさに繋がっていくのではないか。
- ・保護者も子どもも見通しを持って生活できるような導きをしていくことも大切だと感じた。

5. まとめ

「孤立(感)」が生み出す「虐待」、「孤立(感)」が生み出す不安や自尊心の低下を感じることができた。そして、その「孤立(感)」には、私たち保育者の関わり方も大いに関係していることが分かった。

相談窓口の明確化を図るため、地域の関係機関を具体的に調べることで、子どもや保護者の必要性に応じて繋がられる機関を知ることができた。しかし、様々な視点や背景を探っていく中で、適しているからといって関係機関に繋げることで、相談者は「話をきいてほしかっただけなのに」というような思いや、「紹介されたから関係機関に出向いたのに思ったような応えは返ってこなかった」等の相違から孤立感がうまれる場合があることを知った。子どもや保護者のより良い生活の為に関係機関に繋がりたいと感じたときは、「繋がりたい」「繋

がったほうがいいのかも」と思えるような関わり方、また、関係機関との連携を図ることが重要だと思った。

保護者にとって、保育者にとって、その子どもにとって「最善」の感じ方は異なるかもしれない。しかし、一人の子どもをみているという事実は一致している。その事実から見える異なった意見を言い合いそれぞれが認め合えるような関係構築をしていきたいと思った。そのために、まずは保育者自身が「保護者の責任のもとで子どもは育つ」という概念を取り除くことが、共に子育てをサポートする同志への一歩になるのではないかと感じた。

この研究活動を通して、虐待防止の最大の方法は、子育ての中に「楽しさ」をどれだけ見つけられるかどうかだと感じた。「見通し」や「想定」し、できる限りの余裕をもって向き合うことが楽しさ探しにつながる保護者、反対に「想定外」が楽しさ探しにつながる保護者、様々だと思うが、私たち保育者はそれを見極めながら、様々な対応ができるような体制を整え孤立感を生み出さないよう意識していく必要があると感じた。

研究活動「からだの性・こころの性」

参加メンバー

望之門学童クラブ：大西 奈々子

長居子どもの家：横山 奈津美

今川学園子どもの家：森川 貴史

育徳園子どもの家：岩出 愛美

○テーマに至った経緯

2023 年度に保護者より「性教育について子どもと話すことが難しい、学童施設で子どもたちと話をしてほしい」と要望があり、まずは大人が性教育を学ぼうと取り組み始める。性教育の内容は、性別や身体の仕組み・自己の性に関わる事柄とそれによって影響される態度や行動など多岐にわたり、しかし印象として“性＝性交渉”との発想になりがちで、そういった話題を口に出すことが子どもたち、もしくは大人自身にもタブー視されていないだろうかと考える。SNSの普及、使用の若年化により発達や理解力の乏しい児童までがそういった言葉や事象に安易に触れる機会を持つことが出来てしまう。子どもたちには年齢や環境に応じた知識を身につけ、自身の体（心）・他者の体（心）を大切にすること、自分の身を守ることが出来る適切な認識と「NO・SOS」が言える力を身につけてほしいと願う。

また性的少数者や子どもの性の違和も視野に入れると身体的な特徴だけの対応・検討だけに留まらず、様々なケースをスタッフ自身が知識を得て学ぶことの重要性・早急性を感じる。

子どもたちとの生活の中で、どんな子どもも過ごしやすい環境を整えるために、今現場で起きている疑問や悩みを話し合い、得た知識を適切に子どもたちに伝えるためにどうすべきか、伝えるべきことや伝え方について研究する。

キーワード

子どもたちの生きづらさ、性自認、性教育、幼児教育の中の性教育、「嫌」と言える子どもになる、親に・子どもに言えないことを学童支援員に言える関係へ、共有することで見通しをもって話すことが出来る。

○ねらい

- ・子どもたちが自身の体（心）と他者の体（心）を大切にすること、自分の身を守ることが出来る適切な認識と「NO・SOS」が言える力が得られるようになる
- ・性違和、性自認について、さまざまな価値観があることを知る
- ・子どもたちに年齢や環境に応じた適切な知識伝える、伝え方を学ぶ

○方法

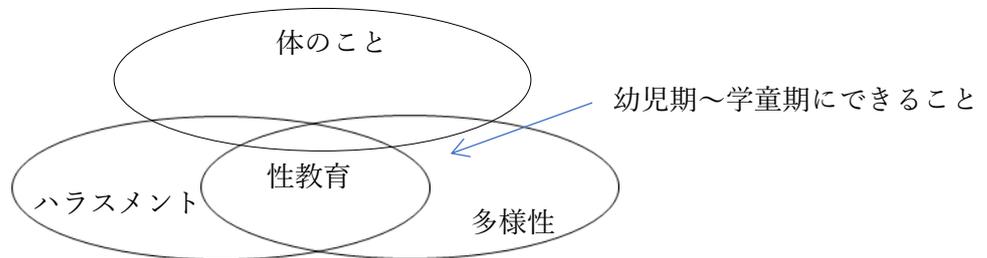
- ・著書や動画などから現在の性教育に関する知識を学ぶ
- ・自分（他者）の体・心を大切にするとはい何か、“性”というキーワードから考える（性自認・性志向など）
- ・実践から性自認と性違和を感じている子どもとその周りの子どもへのかかわり方について考える
- ・助産師を招き、幼児期と学齢期の子どもを対象に性教育を行っている法人がある。専門家の力を借りることで学びが深まることが期待される。

○研究内容

第1章：“性”について考える（研究活動スタッフ間で意見共有）

1. 性について

- 近年、様々な場面で「性」に関する問題が起きている。
- 元を辿ると、それぞれが生きる上で、育ちや環境によって築かれていた価値観によって生まれるトラブルなのではないかという思いに至る。
- 幼少期から「性」について学ぶことで、価値観の幅が広がり、様々な思いを抱えた人に寄り添える人になるのではないか、そのため近年では乳幼児期からの性教育に関する著者や絵本などがあるのではないか。
- 集まったメンバーだけでも、性問題についての着眼点は異なる。
- 「性教育」と一言と言っても、「性自認」「ハラスメント」「多文化」「多様性」など、学童施設において気になる場面は多種多様。どこを捉えて、私たちは学び、子どもたちへ伝えていくか考えなければならない。



- 気になる場面に立ち会った際にどのように声を掛け、どのように周囲に伝え対応していくか、実際のエピソードを集めて討議する。
- 子どもたちが自分の気持ちに正直になって疑問をもつことはよい。様々な人に出会い、こういう人もいる・こんな感じ方の人もお互いを自然と受け入れられる場所に・社会になればと共有する。

2. エピソードについて

○学童施設において、各々気になる場面

性差の価値観によるもの

- アルバイトと子どもの距離感。スキンシップが異性だと“近すぎてだめ”と思われるのか（男性職員と女兒、女性職員と男児）
- 一緒にあそぶのはいいけれど、異性だと手を繋ぐなど嫌という子どもの声。
→拒否された側の気持ちはどうなのか。
- スキンシップの難しさ

個性への価値観によるもの

- 男らしく、女らしくとあまり言わなくなってきている
→「この子」らしくない…らしさって？
その時の気持ちの浮き沈みもあるが、キャラ付けしていないか？
- どうせあの子はこんな子だろう、子どもも大人も決めつけていないか

○エピソード

① A児

- ・今年度より入所 3年生（体の性は男性）
- ・ランドセルの色 茶色、花のワンポイントあり
- ・持ち物も色味はナチュラルカラーが主だが花や小動物の柄があったりかわいいものが多い
- ・制作時はピンクの画用紙や折り紙を選ぶことが多い

先日、在籍時のお迎えに着いてきた保育園児と支援員が戦う女の子のアニメの話をしていると、本児も入る。その際に他児から「それってちっちゃい女の子の見るアニメやで」「こいつ女やん」と言われて黙り込んでしまう。

② B児

- ・姉、妹がいる男児
- ・おさがりではないが、姉妹の衣服をみて自分もかわいいものが着たいと着ている
- ・ランドセルカラーをピンクが良いと話していた（実際は黒）
- ・1、2年生時期には5～6年女子のグループに入って遊ぶことを好み、同学年男子のグループには入りたくないと主張
- ・同学年男児から心無い投げかけやからかいもあり、一時期学童に来ない姿もあった。
- ・これらのことから心の性は女兒なのではと様子を見守る
- ・上級生女兒たちが卒所し、3年生になると服装・遊びの好みに変化がある
- ・失敗できない傾向にあり勝ち負けのある遊びに参加しなかったが、本人の努力が自信に変わり遊べるようになる
- ・コロナ禍で制限が増えた際に荒れ、しかし徐々に支援員・周りを巻き込んで制限の中で実現できる方法を考え始める。幼少期を振り返り、性別で分けてほしくなかったと伝える。

③ 2年生男児

- ・他男児がプラトゥーンやマリオなどの塗り絵を選ぶ中、女兒に人気のメイクアップ塗り絵を選択
- ・周囲の児童が「男なのに」とみる中、5年女子「ブレス（漫画）みたい。女の人をきれいにしたいん？」との声があり、漫画など子どもの身近にあるものからも知識や今までと違った視点が得られる事に気付く

○エピソードより感じたこと

- ① ・そういう色が好きなだけ、かわいいものが好き
 - ・女の子のキャラクターに興味がある
 - ・「こいつ女やん」というのは“きめつけ”であり、自分のこうしたいという思いを締め付けている。
- ② ・性自認などこちらで考えすぎてしまうと本児の思いと違うこともある。
- ③ ・そういう人もいるということをいろんなものから学び、共感してくれる人がいることで安心感を得る。

<気づき>

- 周りの子どもにどう説明するのが大事
「そんなん言ったらあかんで」という声掛けになると、言っではいけないことということだけが周囲にインプットされてしまい、当事者の本心には目を向けない、タブー視され偏見に繋がってしまうのではないか
- 学童の中で受け入れられることで、学校にいても味方がいることに繋がる。
- 何気ないところにいろんな視点があられているのではないか。

3. エピソードより感じたこと

- 性別など関係なく、好きなことをしているだけ
- 多様性を知っているかどうかで違う
- なぜ? どうして? と疑問に持つのは純粋な気持ち、自然なこと。その疑問を受け止めて、偏見にならないようにしていきたい。
- 日本の性教育は諸外国に比べても遅れていると聞く。日本の教育現場では伝えられていないことも多いのではないか。
- 疑問や偏見に出会ったときにどう声かけしたらいいのか、支援員も様々な考え方に触れるべきである。
- 子どもの育ちに繋がるような配慮が必要
幼児期に自分で選択が出来るような保育 → 認められるという安心感が生きる上での土台となる
学童期になると「他者」への興味がわいてくる → 「なぜ」という思いに対して丁寧な関わりが大切

第2章：施設で実施した“性”に関する事例

1. 生物学的“性”におけるからだの仕組みについて知る（育徳園子どもの家）

○実施するにあっての経緯

- 2023年、保護者から提案があり、保健師の方に性教育で伝えるべきことについて話をさせていただく。親から子へ話す難しさ、どこまでオープンにして話していくか、自分の知識がまだ不十分など感想はさまざまであった。まずは「プライベートゾーンについて」や「なぜ生理や射精が起こるのか」など、子どもたちが自分の“生物学的性”について知ることが今後の第一歩になるだろうということで、保護者の協力のもと、子どもたちに対して、“生物学的性”について知ること、そして「じぶんのからだを大切にしよう」というテーマで話を行う。

○実施方法

① 1・2年生へのアプローチ

- 「だいじ だいじ どーこだ」の絵本の読み聞かせのあと、プライベートゾーンについて学び、他者に触れられそうになった時にどうすべきかの対処方法について伝える
 - * プライベートゾーン…水着でかくれるところ、だれでも触れてはいけないからだの部分
 - * 「やめて」といえる勇気、逃げる勇気、身近にいる大人に相談すること

② 3～6年生へのアプローチ（2学年ずつに分けて話す）

- 生物学的性の身体的特徴、および生理現象について（生理・射精）、またそれが起こった時の対処の

仕方について。

- ・ナプキンの経血吸収量の実験

○実施してみて、子どもたちの様子及び変化について

- ・1～2年生に関しては、水泳の授業後ということで学校でも話を聞いており、プライベートゾーンについて理解できていた。いざというときに「やめて」ということに対しては「緊張してしまうかも」と意見があった。保護者以外にも学童の支援員にも相談してもいいという旨を伝えることができた。
- ・3～4年生は、学校で聞いている様子だったが、どの学年よりも興味をもって話を聞いていた。特に「生理」についてはこれから起こることということで不安を感じた児童もあり、もし学童にいるときに生理がきたらどうすればよいかについて話げできた。母親が生理でしんどい思いをしていることを知る児童は、症状についての理解もあった。実験においても、経血量を注射器で測ったことで驚きがあったようだった。
- ・5～6年生は、話も理解しており、実際に起きている、周りの人がそうであるということで、話を聞く中で照れたり友だちと顔を見合わせたりするなどの姿もあった。
- ・家庭では話をしたかどうか調査できていないが、体に関する絵本を本棚に設置していると、興味を持って手を伸ばし読む姿が見られた。

2. 個人マークの振り分けについてどう思うか話し合う（望之門学童クラブ）

○実施するにあたっての経緯

- ・子どもたちの色やキャラクター、イラストに対して「これは女のやつ」と無意識に感じているだろうか？と疑問があり、また幼少のころに関わる大人の声かけや保育環境、保育教材から子どもの偏見に繋がるとしたら見直すべきこともあるのではと感じ、聞き取りと調査をする。

○実施方法

- ・小学2・3年生男女を対象（30名程度）
- ・導入に、自身の保育園時代にマークを覚えてもらい、どう思っているか聞く。
- ・様々な色のイラストを用意し「男の子にしか当てはまらないマーク」「女の子にしか当てはまらないマーク」「どちらにも当てはまるマーク」「どちらにも当てはまらないマーク」の4分類に分けてもらう。
- ・なぜそう思ったか聞き取り調査をする。

※イラスト例：赤いリボン、青いリボン、ピンクのハート、水色のハート、リボンのついたキリン、ピンクの電車など50種類程度

○分類分け結果

- ・ほとんどのものが「どちらにも当てはまる」だった。
- ・悪いイメージのもの“ブタ”“虫歯”などのマークは当てはまらないに分類されていた
- ・赤いリボンはコナンのイメージから“男の子のマークちゃう？”と議論していた
- ・男の子でもハートやリボン、女の子でも電車や恐竜でも良いと話す。（昆虫嫌いはマークでも嫌だと話す）

- ・アレルギー児に卵のマークを聞いたところ「食べてみたい憧れがあるから嬉しい」とのこと

○考察

- ・改めて聞き取りの場ということで、模範解答の様に話す子が多かった。それだけの積み重ねなどがあったのかと感じる。普段の会話では“そんな女みたいやん”という声も聞かれる場面もあり、知識として頭にはあるものの何気ない会話の中には偏見に近いものも感じられ、おそらく関わる大人の何気ない声掛けにもそういったものが混じっているのだろうと推察される。
- ・ただ、今回子どもたちの聞き取りから、この子どもたちが親世代になった際には今よりもっと多様性が認められ、少数派を排除することが減り、「そんな人もおる」と受け入れやすい社会になっているのではないかと感じた。

3. 事例からの気づき

- ・ 大人が思うほど、子どもは“性”について気にしていない
- ・ 大人は今まで生きてきた環境や経験から、価値観ができてしまい、“性”に対する意識へのこだわりがある。
- ・ 子どもの価値観の形成には、周囲の大人の価値観が大きく影響している。
- ・ “性”に関して話をするうえで、施設側の価値観、保護者側の価値観など、それぞれの視点から子どもへのアプローチ方法もことなるのではないかという意見がでた。
- ・ “性”に関してタブーを感じる前に、いろんな人と関わることで知識を得て、自分と違う価値観に対する受け入れができるのではないかということに至った。

4. これから保育をしていくうえでどうしていくか

- ・ 職員の味方・考え方を変えていくことが一歩前進となる。
- ・ 性別における偏見に対して、年齢関係なく現代社会の状況に関しての情報更新が必要である。
- ・ 施設内で“性”に関するトラブルや場面に会った時の対処が後手にまわりがちであり、職員自身が自分の考えを押し付けず、子どもの考えを聞くことが大切。
- ・ 性的志向、外国籍など多様化する社会において「こんなひともいる」ということにふれる機会をもつことが必要である。

第3章：保育の中での男女区別について

着替えやトイレなど男女にわけられる場面が保育の中には当たり前のようにあるが、あそびの中でも男女区別などは必要なのかという意見が出てきたため、ともだちドッチボールのチーム分けについて話し合う前にスポーツにおける男女差についてディベート形式で話し合った。

<男女分けた方がよいと思う意見>

- ・ 体の発達、体のつくりのちがいによる筋力の差、体格の差がある
- ・ 見た目の判断でチームが分けられる
- ・ 子ども遊びをみても男児が運動あそびをすることが多く、女児は少ない印象のため得意な児童が

少ない

- ・オリンピックなどの大会でも男女差で記録に差がある

<男女分けなくてよいと思う意見>

- ・自分の性に対してよくわかっていない段階で、区別する必要があるのか
- ・女性であっても力のある仕事は出来るし、運動能力が高い人がいる。男性でも運動が得意ではない人もいる。その人次第である。
- ・中学生になるころには男女分けられるため、小学生のうちには男女一緒に遊べない

<その他の意見>

- ・自分の能力に合わせて、同じレベルの人と競う。得意不得意でわかる。

○ともだちドッジボール大会では・・・

小学生のうちには、男女の力の差が体格によって生まれるのは高学年以上であり、小さいころからいかにその遊びに触れてきたかの経験値によるものが大きいとの結論に至る。そのため、ともだちドッジボール大会では、男女で分けることはせず、体格差の力関係が分けられるよう学年によって分けた。しかし、高学年でも小柄な児童はいるため、児童の気持ちにも寄り添う必要があると考える。どこにピントを合わせるかでかわることがわかった。

第4章：当事者の話

○中学生以上会議主催（2025/1/15 実施）

「ありのままのあなたでいい ～自分らしく生きるとは～」：谷川彩莉さん

- ・LGBTQ と4つの性について
- ・いつ自分がこころとからだのちがいに気づいたか（幼少期から今に至るまでの話）
- ・どこに焦点を当てるかでかわる少数派（マイノリティ）について
- ・「自分らしさ」について
- ・「こういう人もいる」ということを「知る」ことの大切さ
- ・谷川さん

「まずは自分を大切にしてほしい、そして周りにも大切にしたい気持ちを持ち、他人にも優しくしてほしい。自分の得意、不得意も受け入れる。それぞれ出来ること、出来ないことなどある。ありのままを受け入れてほしい」

「自分だけ違うときに、自分の意見を表に出すことは勇気がいる。周りからみたらほんの少しのことかもしれないけれど、それはすごいこと。だから勇気を出して行ってほしい」

○感じたこと

自分の性別に違和感を抱えていても抱えていなくても表せられる「4つの性」というものがあり、日によって・好みによって違うという言葉に驚きとともに、そのような選択肢があることで性に関する認識にも変化が生まれた。幼少期からのお話には、周囲の理解や自分自身と向き合う中での葛藤な

ど苦しいこともたくさんあったことを話されていたが、その中で出会った人によって、「ありのままの自分を受け入れる」ことが出来るようになったという話を受け、いかに周囲が寄り添えるかでその人自身の生き方が変わるのかが知れた。「自分はこんな人間なんだ」ではなく、「こんな自分もいい、自分らしくいる」ということはどの人にも言えることであると思うし、「こんな人もいるということを知ってほしい」という言葉は、性的少数派の人に限らず、それぞれの個性にも言えることだと感じた。その中で「こんな人もいるということを知る」のはどのくらいの年齢からがよいのかという考えに至る。

第5章：“からだの性” “こころの性” についてどう伝えていくのか

“性”について話し合う中で、「からだの性」「こころの性」「性志向」「性違和」などいくつかの内容に枝分かれしていくこと、またそれらが複数重なる部分もあることがわかった。人によっては、“性”という言葉の中に複数の意味を感じてしまい、敬遠してしまう話題でもある。

「男らしい」「女らしい」などの言葉や価値観がある中で育つ子どもたちに、セクシャルマイノリティ（性的思考や政治人などにおいて社会的に少数派の人々を指す）の児童や友人、周囲にいたときに「ちがっていいんだよ」と寄り添える人になってほしい。また自分自身が少数派になったときに、一人で抱え込まず人にうちあけられる環境になってほしい。そのためにはいつ頃から「ちがっていい」こと、そういう考え方の人がいるということを伝えていくべきなのか、職員たちで下記について意見交換を行う。

○子どもたちに伝えるのはいつ頃がよいのか

<伝えるのは早いほうがよい>

- 4歳ごろから、自分は周りとはちがうかもしれないと気付く幼児がいる。性違和について話をする機会があれば、この子どもにとってもよいのではないか。
- 機会を設けて話をするのではなく、絵本などを準備するなど環境を整えることで、自然と自分の中に取り入れられるのではないか。
- プライベートゾーンなど、体のつくりについては伝わりやすい。自分の体を守るためにも早いほうがよい。
- 性自認については早いほうがよい。

<もう少し成長してからのほうがよい>

- 性交渉などに関しては遅いほうがよい。早く伝えてしまうことで、興味をもってしまい、間違った方向にってしまう可能性もある。

<タイミングをみて話すほうがよい>

- 子どもの興味関心から信頼できる大人に自ら聞くこともある。その時の子どもの年齢や理解度などを踏まえ、答え方を変えるべきである。
- 誤った知識をネットから知ることがあるので、それが分かったタイミングで正しい知識を伝えたい。

○気づいたこと

- 職員によっても価値観は様々だが、「からだのつくり」「プライベートゾーン」については幼児期から伝えていく必要がある。また伝える側としてもからだについては伝えやすい。伝えた際に、子ども自身の性自認と実際の体の性が違っていても、子ども自身について受け入れていく。
- 子どもたちの純粋な質問には、事実として伝えるべきであり、子どもの反応や理解度によって答え方には注意が必要だ。また職員自身も知識を十分に備えるべきである。
- 保護者の価値観によっては、話しにくい内容もある。子どもの興味関心のタイミングで、子ども自身、そして保護者にも伝えていく方がよいのではないかと思う。
- 子どもたちの成長の段階に合わせて、一つずつ伝えていくことが、施設職員としてできることではないかと思う。

第6章 感想

まずは自分のことを知る。プライベートゾーンなどを幼児期から伝えることで、自分の体を大切にするという意識を身につけることができるのではないかと思う。しかし、伝え方を間違えると性違和を感じている子どもにとっての不安につながるため、言葉選びや伝える際の教材には配慮が必要である。

次に環境を整える。保育所や学童保育など子どもたちが日常を過ごす環境の中には、性差を感じさせるところがまだまだあるが、男らしさや女らしさではなく、自分らしさを感じられる場づくりになるよう、出来ることから少しずつ環境を変えていくことが大切である。幼少期から絵本や信頼できる大人との会話を通して、子ども自身が性についての知識を身につけ、価値観を育てていくことで自分を大切にできるようになったら、周囲の人に対しての思いやりやその人自身を受け入れるという環境が整っていくのではないかと考える。この話題に関しては「これはこうだ」と決めつけるのではなく、さまざまな考え方に触れ、「こういう意見もある」「こういうことでこんな風を感じる人もいる」と自分以外の考え方をまずは知り、その人自身を受け入れていける社会になれるよう、今わたしたちにできることを探していきたい。

最後に性という言葉について。性という言葉の中にはいくつもの意味があり、「性教育」というものを保育に取り入れるときには、年齢や理解度によって内容にも段階が必要である。その都度その場に必要情報を伝えられるよう職員も知識を養い、子どもたちに「じぶんをたいせつにする」ということを伝えられたらと思う。

各担当の報告

情報交換・あそび

長居子どもの家 横山奈津美
平和の子どもの家 齋藤千明

今年度は情報交換とあそびを1か月交代で行う予定でしたが、なかなか計画通りにはいかず、情報交換が多くなり、あそび紹介が少なくなっていました。情報交換ではテーマを周知してから各自考えをまとめて次の回に意見交換を行うことが多かったのですが、タイムリーな悩みを出してその場で話すこともありました。全体で話すこともあれば、2グループに分かれて話した後に全体で共有するなど、その時々で形を変えながら行いました。タイムリーな話題をよりたくさん話すことができれば、より保育に還元できたのではないかと思います。日々の中で「こういう時、他施設ではどうしているのだろう？」と思うことがあっても、研究会の時には解決していたり思い出せずにはいたり、小さな疑問や悩みが抜け落ちてしまう事が多かったように感じます。

半数以上のメンバーが研究会への参加が初めてということで、回を重ねるごとに研究会が始まる前や終わった後、休憩時間に各々で話す姿が見られました。そういう時にポロっと話題があがることも多かったので、次年度はフリートークの時間も大切にしたいと考えています。そして、その中で出てきたワードから情報交換を行い、実りある時間にしていきたいです。また、あそび紹介や実践も自施設に還元できるよう計画的に行いたいと思います。

5/10	保育園と学童の違い、ギャップについて けんかの仲裁 学童での活動や子どもの様子をどのように保護者へ伝えているか
5/31	工作・クッキング・集団あそび等設定があるものに対する進め方（集め方、導入方法）
6/7	子どもの「やってみたい」から始まった活動についての対応
6/21	アレルギー対応おやつを紹介（コーンフレークおこしクッキング） 各施設のアレルギー対応おやつレシピ公開
6/28	災害時の保護者への連絡方法 あそび紹介…「ボッチャ」「ストライク」
7/5	外あそび・室内あそびの紹介…「言うこと一緒、やること逆」「人間間違い探し」 「コロケ」 行事の際の安全管理について（公共交通機関の利用時）
10/4	ドッジボール
10/11	職員会議の持ち方について
11/22	雨の日のあそびについて
12/13	金すごろく
12/20	不登校児童について
1/24	職員体制、書類作業等の時間の作り方
2/21	宿題について
3/7	性教育のタイミング
3/14	職員の休暇について

2024 年度 施設間交流活動報告

長居子どもの家 大城楓恋

本年度の研究会の年間テーマである「地域に踏み出す一歩目を～今と未来に子どもの笑顔を～」をもとに、自施設だけでなく他施設の子どもたちとの遊びやささまざまな活動を通して、興味関心や子どもたちどうしの繋がりを広げていくにはどうしたらよいか、考えながら意見を出し合い企画を行いました

ねらい

- 施設間交流を通して他施設に知り合いを増やし、行事等で会ったときに名前を呼び合う関係性を作る。

活動内容

実施日	開催場所	交流内容	参加施設
6/8	育徳	ポッチャ大会	育徳・長居
7/1	各施設	Zoom 交流	全施設
7/6	阪南小	いろいろあそび	育徳・今池
9/29	育徳	ドッジボール交流	長居・育徳・やまと・望
10/7	望之門	将棋交流	望・育徳・今池
10/21	望之門	将棋交流	望・育徳
11/18	育徳	将棋交流	長居・育徳・望

反省と課題

- 当初の予定より施設間交流の機会が少なかった。
- 実施日のお知らせが急になってしまい、参加できる施設が限られてしまうことがあった。
- 遠方の施設がなかなか参加できなかった。

良かった点

- 機会は少なかったが、将棋交流やドッジボール交流のように行事を絡めた交流ができたことで、行事に対する子どもたちのモチベーションが上がった。
- zoom 交流では、各施設の子どもたちどうしささまざまな方法で楽しみながら交流している様子が見られた。
- いろいろあそび交流では、特に内容は決めていなかったが、その場その場で遊ぶ内容を子どもたちと一緒に決めていったことで、みんなで楽しむことができた。
- 自施設以外の子どもたち、環境の中で遊ぶことで新しい遊びを教えてもらう、他施設を知ることができた等、さまざまな発見があり子どもたちにとっていい刺激になった。

まとめ

最初は遊びの内容が目的だった子ども達が、施設間交流や行事を重ねていく中で「〇〇学童の〇〇ちゃんも来るのかな～？あの子が来るなら行きたいな～」「次の大会で〇〇くんに、〇〇学童に勝ちたいから練習頑張ろう！」「〇〇学童のあの広場めっちゃ良かった！またあそこで遊びたい！」等、参加する目的が内容だけでなく、「他施設のあの子」に変わっていく様子が見られ、活動こそは少なかつたものの、施設間交流は子ども達にとって他施設を知り、繋がるいい機会になったと実感した。また、課題・反省点で挙げられているように、どうしても遠方の施設の参加が難しく、参加できる施設が限られてしまっていたため、来年度は開催場所や日時、内容等を考慮し工夫していく必要があると感じた。

来年度は今年度の課題や反省点、よかった点を活かし、子ども達が繋がるきっかけとなるような施設間交流ができたらと思う。

2024年度 中学生以上活動報告

今池こどもの家 山田夢果

今年度の中学生以上活動では、はじめに、今までの研究(居場所)の中でみえてきた、「自分たちのために何かされる」ということへの意識や葛藤等も考慮し、どのような活動にしてけば良いのか話し合った。そして、一緒にイベントをつくり、盛り上げ、その姿をみている小学生たちの憧れの的となるような活動を設け、その中から生まれる中学生以上同士の交流に目を向け、何か発展できればと考えたが、中学生以上活動のみとして実現することは、出来なかった。

しかし、一緒にイベントをつくり、盛り上げることができるよう、ドッジボール大会、ともだちフェスティバルまえの打ち合わせ前には、今大会のねらいやそれぞれの役割を丁寧に伝えるよう努めることはできた。また、小学生たちの憧れの的となるよう、中学生以上の力があることで今大会の運営ができているという事実を全体的に伝えた。

今の中学生以上だけを見ていくのではなく、地域で過ごす小学生(施設内含む)の、中学生以上像を想定しながらも、今必要なことはどれだけあるのか見出していきたい。そして、必要なことを取り入れた実践を行っていきたい。

2024 年度 研究会内研修報告

やまと保育園子どもの家 笹井唯衣

4月に研究活動のテーマやチーム決めを行っていきなかに【チャリティー活動について】も研究していきたいと話が上がったが、別のものでの研究活動が決定した為、研究会内研修で学べるよう1学期からどのように行うのか話し合いをすすめてきたが難しく研修内容がなかなか決まらず息詰まった。話し合いを重ね、チャリティー活動から一度離れ、学童のことについて学び、そして保育に活かしていけるような内容へと変更し、今後活かしていけるようなことを学ぶことができた。

今回は、研修内容を決めるまでに時間がかかり見通しを持つことが出来ていなかったため、来年度はみんなの気になっていることから広げて研修を行い、学べる機会を作っていきたいと感じた。

内容

○「おやつ研修」コンフレークおこし作り

ねらい：アレルギー児も増えている中で、全員が食べられるおやつを作り行い、各施設でも提供できるようにする。

○「遊び研修」

ねらい：施設の中で流行している遊びや、独自のルールで遊んでいる遊びを伝え合い、日々の保育の中で活かしてもらおう。

○「動画研修」

ねらい：子どもの主体性を育むためにはどのような言葉掛けや関わりが必要なのかを学び今後の保育に繋げていく。

「おやつ研修」

毎日おやつを提供する学童保育だが、近年は食物アレルギーを持つ子どもが多く、おやつの提供に悩むことがある。食べられる物が制限され、周りと同じ物が食べられないことも多く、食への意欲が低い子どももいる。そこで、各施設どのようなアレルギー対応おやつを提供しているのか話し合いを行った。市販のおやつや手作りおやつ等様々な種類が紹介され、手作りおやつに関してはレシピも公開し合い、その中から簡単に作れる「コンフレークおこし」を実際に作り試食を行った。マーガリンを使用するが、豆乳マーガリンで代替えることで乳アレルギーの子どもでも食べられる物になる。今回は、通常のものアレルギー対応のものを、両方作り食べ比べを行った。「どっちが豆乳マーガリンだっけ？」と意外に味に大差はなくアレルギー対応も美味しいと好評であった。それぞれの施設でおやつの情報を共有できたことで、アレルギーをもつ子どもにとっておやつの時間が楽しみになり、食べるのが幸せな時間になって欲しいと感じる。

「あそび研修」

各施設でよく遊んでいる人気の遊びを紹介し、実際に名前を聞いても分からない遊びは実践も行った。低学年でもすぐに理解して遊べるようなものが多かったので、雨天で戸外に出られない時やキャンプの際にも使えるのではないかと感じた。春夏秋冬での遊びなどを別の冊子にまとめたので今後遊びを進めていくうえで参考になればと思う。

「動画研修（子どもの主体性を伸ばす言葉かけ～保護者とのコミュニケーションに活かして支援に繋げる～）」

コドモンのアプリ内にあるNPO 法人親子コミュニケーションラボ代表理事の天野ひかりさんの研修をみんなで見た。コドモンでは様々な動画研修があるがその中でも学童保育の分野に入っている内容にすることで保育に活かせれると思い選択を行ったが、内容は保育園時代からの関わりの大切さについて話されていることが主にであった。小さいころからの積み重ねが大切なことを改めて学ぶ場になった。自己肯定感を育むためには子どもの思いを認める（ダメと言わない）、先生がお手本を見せるなど普段の保育の中で行なえているのかと見つめ直す時間となった。自己肯定感を器にして表すと入る量が決まっていて、それを越すと溢れていく。子どもたちの器は小さいので少しずつ知識を入れていけるような関わりが大切だと感じる。自己肯定感の低い子どもは各施設にもたくさんいるので、今回の研修で学んだことを活かし、少しでも「大丈夫」や「できる」などと思える強い心を育てていけるようにしていきたい。

2024年度 全国地域福祉施設研修会 第23回 児童部会報告

『子どもの権利と居場所について』=地域にたくさんの居場所をつくろう=

今池こどもの家 山田夢果

日 時：2024年12月14日(土)～15日(日)

会 場：長居保育園

主 催：日本地域福祉施設協議会・特定非営利活動法人 大阪市地域福祉施設協議会

講 師：栗本 正則氏(NPO法人 FAIR ROAD 副理事長)

参加施設：やまと保育園・子どもの家、阿さひ保育園つくし会、阿倍野区清明丘地域活動協議会、
愛染橋保育園・児童館学童クラブ、育徳園保育所・子どもの家、今池こどもの家、興望
館、松原高校、西成区社会福祉協議会、長居保育園・子どもの家、望之門学童クラブ、
ちどり児童会、大国保育園 職員、OBOG (申し込み順で記載)

参加人数：56名(講師含む)

内 容：第一部(14:30～) 栗本氏基調講演 テーマ『子どもの権利と居場所について』
第二部(17:00～) ワールドカフェ みんなで考えよう『居場所って何?』
交流会(19:30～)

児童部会は、主に日地協に加盟する児童施設職員が集まり、児童福祉に関する知識や経験による知見の分かち合いを得られるような研修会である。基調講演をもとに職員が抱える日々の悩みや葛藤から見える新たな課題や活動内容等を話し合うことでより良い保育・児童福祉を目指すものであると考える。

子どもを中心とした運営について協議し、当事者の子どもたちの参加の権利を保障するという意向から、2022年度(名古屋で実施)より中学生以上の子どもたちが参画する。

今年度の児童部会第一部では、栗本氏よりNPO法人 FAIR ROADの活動報告をもとにした、基調講演を聴く。FAIR ROADでは、「**こども若者が孤立しない共にケアする公平な社会をつくる**」ことをvisionとして掲げ、「**学校・行政・地域とを重なる機会とそこに関わる人を増やし、こども若者を孤立させない**」ことをmissionとして、タイ・ビルマ事業と国内事業を展開されている。タイ・ビルマ事業の内容は、スタディツアー(難民キャンプ・スラム地区・移民地区)、灯を届けるソーラーランタン普及事業(企業連携)、図書館支援(NGO連携)を、国内事業では、校内居場所事業(大阪府教育庁/福祉局より事業委託)、地域の居場所事業(子どもの見守り強化事業ほか)、わかもの応援事業といったものである。

第二部では、スマイル会(大阪の中学生以上活動)のこどもたちがファシリテーターを務め、ワールドカフェが行われた。ワールドカフェのトークテーマは、①欲しいもの、②好きな場所、落ち着ける場所(嫌いな場所)、③無くなったらどう思うか、どんな行動をするか、④参加者の好きな場所はどのような権利が守られているか(嫌いな場所はどのような権利が守られていないのか)子どもの権利条約カードを使って考える の4つであった。「居場所」の定義はそれぞれにあり、同じところだったとしても、そこを「場所」「空間」「人(誰と居るか)」等、どのように考え居場所と感ずるのか、求めているものの違いを感じることができた。

行事の報告

第38回ともだちドッジボール大会

育徳園子どもの家 高角 拓実

【日時】 2024年11月3日(日) 9:30~15:30

【場所】 我孫子中学校 グラウンド

【参加人数】 195人

【参加施設】 愛染橋児童館学童クラブ・阿さひ保育園つくし会・育徳園子どもの家
今池こどもの家・今川学園子どもの家・長居子どもの家・望之門学童クラブ
平和の子どもの家・やまと保育園子どもの家

計9施設

今年度の研究会のテーマは「地域に踏み出す1歩目を～今と未来に子どもの笑顔を～」に決まり、ドッジボール大会のねらいとしては「みんなであつく みんなでたのしく」「挑む気持ちを大切に」で進めた。現在なかなか目に見えないものへの挑戦や苦手なものへのチャレンジ、失敗することへの怖さが原因なのか行事に参加する子が減少傾向にあるように感じる。参加人数が多いほうが良いとは限らないが、誰もが参加したいと思えるような魅力のある大会にできればいいなと考えている。

今年のドッジボール大会は、午前は各学年で施設対抗戦をおこなった。午後からの試合は研究会テーマである地域に踏み出す1歩を元に考えた。1年生は施設混合にしておこない、2.3年生は所属学童の区に分かれ混合チームを組み試合、4.5.6年生は順位を参考にチームを組み試合を行った。そのなかでも子どもたちは自分たちで作戦を考えるチームや話をして盛り上がるチームなど関りが深まっている様子が見ることが出来た。

子どもたちの感想

うまい子がいて頑張ろうと思った	友だちが出来た
お昼の自由時間が楽しかった	施設対抗をもっとしたかった
他施設の上手な子と同じチームになれて楽しかった	楽しかった
賞状もらえてうれしい	ドッジクラブ作ってほしい

保護者の感想

観戦できてよかった	子どもと試合が出来てよかった
大人のドッジに参加したかった	楽しい時間をありがとうございます

運営スタッフ・指導員の感想

見に行きづらいため動線を確保してほしい	子どもたちが満足そうだったのでよかった
鬼ごっこをする保護者がいた。運営側の注意なし	突き指などに対応するため保冷剤があってもいい
ルールを覚えていない指導員がいた	子ども主体の行事が見たい
OB 対職員は面白いが見ている側がわかりづらい	子ども対保護者の試合がよかった
進行表のおかげでスムーズだった	審判に統一感が必要
余裕をもってスケジュールを組んでいたため、ハプニングにも対応できた。	合同練習などの機会を設けたい

まだまだ記載できないほどの感想やご意見をいただきました。ありがとうございます。

来年度の大会に向けて、時期や場所の検討も必要だと感じてる。時期は 11 月ごろは少し涼しくなり気温もちょうどいい気温であるが、バザーなどと被る可能性もある。場所も今回は急遽長居小学校から我孫子中学校に変更になったが、来年度はどうするのかなど検討していく必要があると思う。

年間テーマやドッジボール大会の狙いも達成できるように取り組む必要があり、研究会メンバーと一緒に深め、考えていきたい。

ドッジボール大会だけではないが行事を運営していくうえで OB・OG の協力が必要不可欠となっている。ただ、毎回お手伝いという形だけでは来てくれなくなるかもしれないので、来てくれる何か魅力のあるものを考えていかないといけないと感じた。ドッジボール大会では OB 戦は必要ないのではないかという声もあるが、私は個人的にはそうは思わない。OB 戦を楽しみしている OB たちはもちろん、OB 戦を見て、実際に、中で体験して OB たちにあこがれを持ち、卒業したら自分たちが OB で来たい手伝いたいと思う子も少なからずいると思っている。

ドッジボールという手段を使い色々な施設の子たちが交流し関り繋がっていき、大地協や各施設が 1 人でも多くの居場所になっていけるように大会を運営していければと思う。

最後に 9 施設合計 195 人の子どもが参加し、たくさんの OB・OG の協力もあり、応援に駆け付けた保護者の方とのドッジボールを通じての交流があり非常に盛り上がった。

これからも子どもたちが輝けるように研究会の仲間たちと取り組んでいきたい。

2024 年度 ともだちフェスティバル報告

実施日 : 2025 年 2 月 22 日 (土) 9:30~16:00

会場 : 長居小学校 校庭・体育館

参加施設 : 長居子どもの家、今池こどもの家、育徳園子どもの家、阿さひ保育園つくし会、
やまと保育園子どもの家、愛染橋児童館学童クラブ、平和の子どもの家、
今川学園子どもの家、望之門学童クラブ 計 9 施設

対象 : 地域の子ども研究会加盟施設の児童

参加人数 : 小学生 104 名

大会テーマ : ひとりひとりが輝ける場に

テーマに至った経緯 : 既存の大会 (ドッジ・卓球・将棋) や各施設の中での取り組みでは不十分・抜け落ちてしまいがちな子・学童集団の中でレッテル貼りがされ認められていないと感じる子に、大地協行事という大きな集団の場で注目される・認められる場にしたい。同様に、中高生が・職員が輝き憧れられる場所へ、小学生にとって O.B. になった時にあの場所にいたいと思えるような内容・姿を見せてもらえるよう企画に至った。

内容報告 : 1 年を通して子ども研究会の行事の開催時期を見直し、年度末に行った。準備期間を長く持てたことで子どもたちの様子の共有と遊びの充実につなげるために十分な計画が出来た。3 連休初日の日程になってしまい、例年よりも参加人数が減少傾向にあったが、その分参加した子は存分に遊び込めたのではないかと思う。テーマである“一人ひとりが輝く”に着目しても、中高生が (単なるお手伝いではなく) 今まで以上に遊びに参加し関わる姿が見られたことが今大会では印象的であった。今後の大会においてスタッフから“遊びを提供”するのではなく、子どもたちが遊びを創造し広げていく、人との関わりの中で遊ぶのが楽しいと感じられるような行事を目指し、次年度以降も企画・実施に向けて取り組んでいきたいと思う。

2024 年度 ともティバル報告

実施日 : 2025 年 3 月 2 日 (日) 11:00~15:00

会場 : 清明丘中央公園

参加スタッフ : 長居子どもの家、今池こどもの家、育徳園子どもの家、やまと保育園子どもの家、
愛染橋児童館学童クラブ、今川学園子どもの家、望之門学童クラブ

参加人数 : 小学生 50 名程度

大会テーマ : ひとりひとりが輝ける場に

開催に至った経緯 : 地域の子ども研究会ではともだちドッジボール大会、ともだちフェスティバルなど様々な行事の中で地域の子どもたちと共にありたいと、参加していただきやすいよう開催場所を公園で実施することや広報活動など工夫してきた。施設の子どもたちとの大会は規模が大きく準備の負担・施設の子どもたちの情報共有など様々な要因から地域の子どもたちを誘いかけることに手が回らなくなってしまい、参加実績に繋がっていなかった課題があった。地域の子どもたちとの関わりを通して学び、ニーズを探り、ともに歩みたいとの思いから、既存の大会 (加盟施設の子どもたちを対象) とは別で、地域の子どもたちを対象としたイベントを企画した。

内容報告 : いつもは小学生と共に公園に行く支援員も、公園にいる初対面の子ども・保護者と話す中で新たな視点と子どもたちへのアプローチや施設の子との違いを見つけ学びに繋がった。

個人の振り返り

1年間の振り返り

育徳園子どもの家 岩出愛美

学童保育に携わり始め、こんな感じでいいのかな、小学生の発達はどうな流れなのだろうか、他の学童保育はどんなことをされているのだろうか、日々過ごす中で悩みが増えてきたため、今年度研究会に参加させていただきました。

研究会についてお話を伺った際の「悩みを相談出来るような、学童職員の職員会議の場」という言葉が印象に残っています。研究会を卒業された職員さんの思いに触れる機会も多く、自分の思いとの差に圧倒されたこともたくさんありましたが、先輩方が「子どものために」と活動されていた歴史は、自分の考えへの刺激となりました。時代とともにかわる子どもの姿や、職員の思いもあるかと思いますが「子どものために」という気持ちがないと出来ない仕事だなと改めて感じました。

少しずつ研究会に参加する気持ちがほぐれ始めると、今目の前にある悩みについて相談したい！と思うようになりました。しかし、いざ意見を聞こうと思っても上手く言葉に出来なかったり、聞き忘れてしまったりと、せっかくの相談の場なのに上手く活用出来なかったことは自分の中での反省です。

また、自分自身が日々の保育に精いっぱい、今年のテーマである「地域に踏み出す一歩目を」という思いが自分の中になかなか芽吹かずに1年を過ぎようとしたときに参加した“ともティバル”は、実際に関わる子どもは少なかったのですが、普段関わる自施設の子どものとは違う、さまざまな個性ある姿に新鮮な気持ちで関わる事が出来ました。自施設が参加する行事の中では、なかなか注目して見ることができない他施設の職員の方の子どもへの接し方や、保護者との接し方なども、同じ子どもを見ることでさまざまな意見がさまざまあり、自分にはなかった着眼点の話が聞けて、とてもよい学びになりました。

研究活動では、難しい内容に取り組むにあたり、勉強不足なところがたくさんありましたが、話し合いの会を重ねることにとっても意義があったと思います。学ぶことと、実際の保育の中に矛盾を感じることはありますが、それについて考える良い機会となりました。

年間を通してさまざまな意見にふれ、改めて子どもと関わる仕事であるのに、子どもと関わる事が少なかった自分自身に反省するとともに、その反省を活かし、子どものために考え動くことを今後はしていきたいと思えた活力になりました。

1年間の振り返り

長居子どもの家 大城楓恋

今年度から長居子どもの家で学童指導員として働かせていただくことになり、それと同時に研究会にも参加させていただくことになりました。はじめは、自施設に慣れていくことに精一杯の毎日、研究会でも、「自分はこの場で何ができているのだろうか」ともどかさや無力感を感じる日々が続きました。

そんな中、ともだちフェスティバルでふうせん遊びとおおなわのブースを担当させていただくことになり、他の先生方の助言をいただきながら企画を行いました。これまで何かを自分で企画し、実施するという経験がなく、さらに初めてのともだちフェスティバルということもあり「子どもたちは来てくれるのだろうか」「子どもたちが楽しめるようなブースになるのだろうか」「ちゃんとその場を運営できるだろうか」と不安ばかりが募っていました。しかし、打ち合わせの中で「私たち大人も一緒になって子どもたちと楽しみましょう」と言っていたことを思い出し、当日は全力で子どもたちと一緒に楽しもう！と気持ちを切り替え、当日を迎えました。当日、午前中に行ったふうせん遊びには多くの子どもたちが来てくれ、「午後もふうせん遊びやってほしい！」「ふうせん遊びが1番おもしろかったわ！」と言ってくれたり、午後のおおなわでは施設関係なくそこに集まった子どもたちどうしてチームを作り、記録に挑戦したり競い合っていました。

さらに「おおなわのブースあると思わなかった！おおなわめっちゃ好きだから嬉しい！」とずっとおおなわで遊んでいた子もいました。1つの遊びを通して子どもたちが施設の垣根を越えて繋がっていく様子、1つの目標に挑戦する様子が見られ、多少なりとも子どもたちの挑戦する機会や繋がるきっかけになれた嬉しさと同時に、研究会での活動の意義・必要性を実感したともだちフェスティバルでした。

改めて今年度の研究会での活動を振り返ってみると、常に活動の中心には「子どもたち」がいました。子どもたちの今と未来をより良いものにするために私たちに何ができるのか、どうしたら良いのか。そこを軸にさまざまな行事の企画・運営、情報共有、研究活動を行ってきました。全てが初めてだらけの1年間でしたが、研究会に参加させていただいたからこそできた経験、自施設だけでは知り得なかった学びが多く、本当に貴重な経験をさせていただいたと思います。

自分自身の課題や反省点もたくさん見えてきた1年ではありましたが、来年度はこの1年を通して得た知識や経験を活かし、自施設、他施設、そして地域の子どもたちへ少しでも還元できるような取り組みを行っていかれたらと思います。

1年間の振り返り

望之門学童クラブ 大西奈々子

今年度ようやく切願していました地域の子どもたちを対象としたイベントを実施させていただきました。今大会（ともティバル）実施に向けて、今まで子ども研究会のスタッフや沢山の方のお力添えを賜りながら実現出来たと感じております。

なぜ、地域の子どもたちを対象としたイベントを実施したいのか。数年前の地域の子ども研究会スタッフの先輩方が、「“地域の”子ども研究会。加盟施設の子どもたちだけではなく、地域で過ごす子どもたちのニーズにも目を向けてどんな活動がいいか考えよう」と話してくれました。その当時、ただ漠然と「地域の子ども研究会の行事に地域の子の参加も促したら良いんだな」くらいに考えていました。学童で子どもたちと過ごす生活を続け、子ども研究会にて沢山のスタッフの方と話す中で、施設だけで仕事をしない、地域の子どもたちに目を向けるとはどういうことか少しずつ分かり始め、自施設のできる方法で、大地協の大会に地域の子を誘い掛けたり、施設でできることを考え始めたりしていました。その矢先、新型コロナウイルス感染症の流行で、そういった活動が制限されました。子ども研究会の大会も、感染拡大予防の観点から地域の子の参加を控え、会場も小学校となりました。自施設でも地域の子たちと交わることが無くなりました。

感染症の流行が緩やかになり、施設の子どもたちの活動が徐々に再開される中、地域の子どもたちへの活動は中々再開されません。施設内では、子どもたちのケアや今まで十分に出来なかった活動の補填、新たなニーズがありその活動に追われました。公園に出かけたりおやつを買いに出かけたりすることも少なくなりました。園庭を覗いてくれる子にも気軽に“おいで”と言えなくなり、次第に「何が出来るだろうか、何が必要だろう、どんなニーズがあるのか」が全く見えなくなりました。

おそらく、困っている子どもがいる。きっと何か行動したら喜んでくれる子どもがいる。でも何をするのが最善かわからない状態で最善を求めてしまうからこそ何も出来ませんでした。

その時「大地協でなら何か出来ないかな」と思いました。自施設では出来ない活動も、地域の子ども研究会でなら出来るような気がしました。「こんなやりたいな」と話すと「良いね、考えてみよう」と共に考えてくれるスタッフがいました。“大地協が引っ張ってくれたら、実績が出来たら、自施設でも出来る”とワクワクしました。

子ども研究会でも地域の子どもたちへの活動がすぐに実現できたわけではありません。時間をかけて話し合い、何が必要だろうと考えましたが何が必要かは分かりませんでした。それでも1回やってみよう、やってみて何が必要か気づくかもしれない、全く違った活動内容が見えるかもしれないし今までやってきた事を続けてみようと感じるかもしれないと企画をしました。

今年度地域の子どもたちを対象としたイベント・ともティバルをしてみて、“地域の子に何かしてあげたい”というよりは“私たちが学びたい”と思っていることを改めて感じました。何が必要で、どんなことをしたらいいのか、地域の子どもたちと共に歩む中で教えてもらいたい、何か気付くのではないかと考えていたのだと企画を通して実感しました。

今何かが分かったわけではありません。ですがやってみようと思ひ、地域の子ども研究会の仲間と共に出来たという達成感と、地域の子どもたちと共に歩み、学び続けたいと感じた思いを大切に、これからも進んでいきたいと思ひます。

1年間の振り返り

阿さひ保育園つくし会 木野伸哉

「地域に踏み出す一歩目を」と1年間のテーマを掲げて活動をし、施設間交流から始まりドッジボール大会、ともだちフェスティバル、そして地域向けともだちフェスティバルである、ともティバルを開催しました。ともだちフェスティバルではひとりひとりが輝ける場を提供することを目的とし、カラオケ・ダンスや工作、外遊びで記録の競い合い等何かに没頭できる、主役となる素敵な場になったのではないかと思います。実際に当施設の子どもたちから「これやりたい!」「気になる」「やってみたい」との声が上がり、初めてともだちフェスティバルへ参加するきっかけとなり意味のある行事であったと実感しました。今年度は、阿さひが主体となる自然体験応援バザー「わっしょい!金塚」を開催し、地域の人たちと協働し、子どもたちも積極的に参加して店番をする、店を周って楽しむ等普段の生活では交わることが少ない地域の人との関わりを感じられる貴重な体験となりました。

毎年行われるフェスティバルやバザー、ドッジボール大会、卓球大会を通して地域との関わりを増やし、またそれらを通じて地域ごとの違い、自施設の子どもたちや職員の気持ちの変化を感じてこれからの研究会に繋がられていくのだろうと思います。

また、行事の必要性を強く感じており、子どもたちから「学校の友だち同士で〇〇に行きたいけれど校区外だから行けない」「違う学校の友達を誘って一緒に遊びに行けない」という声があがりました。このように子ども同士で何かに参加したいけれど参加できない課題もあり、そんな時こそ職員や大人たちが一緒に参加することのできる大地協の行事の存在の大きさを感じられています。

今年度は代表として研究会に参加させていただきましたが、至らぬ点が多くあり研究会のメンバーが時間に追われてしまう1年となってしまったことを大きく反省しています。しかし、以前からいる職員の方から意見をいただき、勉強させていただく機会となったことに感謝しています。今年度の反省を踏まえて来年度はより実りのある研究会となるよう願っています。

1年間の振り返り

平和の子子どもの家 齋藤千明

今年度初めて子どもの家を担当し、わからないことだらけの日々の中で研究会にも参加することになり、不安でいっぱいの状態でスタートした春でした。正直、研究会に参加するたびに自分が知らなかった世界を知り、他施設と自施設との違いやいろいろな人との思い・熱量の差にショックを受けることが多かったです。

そんな春でしたが、次第に同じ学童で働く人間として研究会での時間がすごくいい刺激になっているように感じました。子どもの家の仕事も手さぐりなことが多い中で、研究会の時間での会話ややり取りが、日々の仕事に反映できるヒントになり、アドバイスにもなりました。

ドッジボール大会、ともだちフェスティバル、将棋大会といった行事にも初参加でしたが、行事を通して他施設の子どもたちと関わることは子どもたちだけでなく、私にとっても素敵な経験になったと思います。自施設的环境下では気軽に他施設へ遊びに行くなどが難しく、ドッジボール大会などの大きなイベントの時に交流することができるくらいですが、それでも子どもたちには貴重な時間になったことと思います。特にともだちフェスティバルでは、今年度「ひとりひとりが輝ける場」というテーマで行い、グラウンドと体育館の両方に様々な分野のあそびコーナーを作ったことで、運動が苦手なドッジボール大会には参加しない子ども、集団あそびが苦手な子ども、不安が高い子どもなど、いろいろな個性をもつ子どもたちが参加してくれました。普段は見られないような姿を見ることができたり、意外な発見ができてたりもしました。子どもたちにとっては、いろいろな人がいるということを知り、あそびを通して他者を認め、他者から認められ、自分のことも認めてあげられるきっかけになったのではないかと思います。

情報交換やあそび、研修の時間も学びになりました。様々な施設の活動や取り組み、個人の考えを知ることで、自施設に還元できたり自身の気づきにも繋がりました。同じような悩みをもつ者同士で意見を交わしたり共感し合ったり、学び合うことが貴重で素敵な時間でした。春には不安しかなかった場所でしたが、少なくとも今は気兼ねなく話せる場所となったように思います。この一年の経験や学びを今後の保育にも活かしていきたいと思います。ありがとうございました。

1年間の振り返り

やまと保育園子どもの家 笹井唯衣

今年度から地域の子ども研究会に参加させていただきました。研究会では、学童で困っていることを各施設ではどのように対応しているかなどを話し合える時間があり、様々な考えや方法を知ることができたいい機会でした。しかし、あまり情報交換の時間が取れなかったり、隔週での開催だったりしたこともあり、話し合う頃には解決していることが多かったので、来年度はもっとみんなで情報を交換し合える時間を作れたらと思いました。

去年まで自施設のドッジボール大会やともだちフェスティバルの参加率はあまり高くありませんでした。今回の【ひとりひとりが輝ける場に】をテーマとし、みんなで考え進めていくことで、子どもたちのやりたい遊びがたくさん詰まっていたこともあったのか、自施設の参加人数は増え、来年度も楽しみにしている声があがっていて嬉しく思いました。【誰が来るのか分からない】【自分から関わるのが苦手】と、子どもが不安に思っている部分を少しずつでも解消していけるように、指導員も間に入りながらドッジボール大会やともだちフェスティバル以外にも施設間で交流ができる時間を作っていきたいと感じました。今回は、大地協で行う行事を引率者ではなく、スタッフとして動くことばかりでした。ドッジボール大会ではルールをあまり理解しておらず審判や進行をしていくことに不安を大きく持っていました。審判の講習を行ってくれたり、丁寧に進め方を教えていただいたり、たくさん助けてもらいました。来年度にはその教えてもらったことを活かしていけるように頑張りたいです。

3月には大地協に加盟されている施設だけではなく、地域の子どもたちに向けたフェスティバルも行いました。普段公園で遊んでいても私自身が地域の子どもに声を掛けて一緒に遊んだりすることはなかったのですが、公園に遊びに来てくれた子に自ら声を掛けに行ったり、一緒に遊ぶ中で様々な話をしたりする機会を作ることができ、年間テーマでもある【地域に踏み出す一歩目を】を少しだけ踏み出せたのではないかと感じました。

今年度研究会に参加させていただいたことにより、私自身学びが多くあった一年でした。この学びを今後の保育にも活かしていけたらと思います。

1年間の振り返り

育徳園子どもの家 高角拓実

子どもの家で働き始めて今年度で4年目になり1年を通しての動きなどもわかるようになってきました。そして今年度は新たに研究会に参加させていただきました。

OBの頃からドッジボール大会やともフェスなどに参加していたので行事などは知っていたのですが、こういったことをしているかは知らないため初めは少し緊張していました。

今回私は、行事チームで「施設間交流」と「ともだちドッジボール大会」を担当し、研究活動は「睡眠障害について」を調べていきました。

個人としての反省は、施設間交流をあまりできなかったことです。もう少し余裕をもって日取りを決め、多くの施設と交流することが出来ればよかったなと感じました。1学期ではペースよくおこなっていたのですが、2学期以降は行事などが入りなかなか行うことが出来なかったため、今後はもう少し子どもたちが行事以外で集まり交流する場を作って行けるよう努めていきたいです。行事前に施設間交流を行い、お互いに知っている状態で行事を迎えることが出来れば、もっと行事への参加や夢中度を上げることが出来たのかなと感じました。

ともだちドッジボール大会は実行委員長として行事を進めていきました。ドッジボール大会自体は僕自身小さいころから経験させてもらっていたことなので、大まかな1日の流れなどはわかっていました。ただ実際に運営側に回るとわからないことが多く、たくさんの研究会メンバーと各施設の職員、OBに助けられ終えることが出来ました。その中で事前に動いていたつもりだったのですが、なかなか私の段取りが遅く進めることが出来ませんでした。当日もなかなかうまく進めることができず慌ててしまいました。前準備や当日も大変ではありましたが、子どもたちの笑顔や「楽しかった」の声を聞いてやってよかったと感じました。来年度は主体的に動き実行委員長のサポートが出来ればと思います。

研究活動では「睡眠障害について」調べていきました。研究活動とは？のところから始まりました。初めはどう進めていくかもわからずなかなか進めていけなかったのが1番大きな反省かと思います。道筋もなかなか決められず、行事や児童部会のことなどに時間をかけてしまい研究活動への時間を使うことが出来ず深めることが難しく感じました。

個人として全体の反省は見通しを立てられておらず、研究会もその場しのぎになってしまうことが多くなってしまったことです。もっといろんな事を深めて行けたかもしれないので来年度からは見通しを立てて研究会に出席できればと思います。

1年間の振り返り

今川学園子どもの家 西岡 亮

今年度、学童保育への異動になり、地域の子ども研究会に参加することになりました。自分自身、日々の学童で感じている悩み事や子どもへの対応、ご家族への言葉がけを研究会の先輩方も感じており、お互いに解決の道を探りながら教えていただきました。

ともだちフェスティバルで担当ブースもいただき子どもたちと触れ合い、その場で子どもたちとフェスティバルを作っていく様子はとても刺激になりました。次回からも参加し、子どもたちとともに考えて作っていけるようなフェスティバルにしたいと考えております。

研究会を通して、「虐待防止」のテーマで参加させていただき、様々なケースのお話を伺うことができ、ロールプレイを通して「どう対応」するのか「どう向き合っていくのか」を考えさせていただく場となり学ぶことができました。途中からの参加ではありましたが内容のある機関になったと実感しております。

1年間の振り返り

愛染橋児童館学童クラブ 細川海晃

今回、年度途中での参加となりました。睡眠障害に関する研究活動の中で実際に睡眠障害の可能性のある児童を軸に研究を行ったことで、新たな知見を広げることにつながりました。具体的には、睡眠障害とはただ眠れなくなるというわけではなく、児童の家庭環境や学校での過ごし方など様々な要因があることが分かりました。今回の研究で学べたことが、すべてではないとおもいますが、今後の保育に生かしていきたいと思えます。

行事の面では、特にともだちフェスティバルに力を入れることができました。企画案を考えると、外遊び担当の方々はどうしたら子どもたちが楽しんでくれるのか、自分で考えて遊ぶことができるのかを話し合うことができました。当日も、私が午前を担当したとばしあそびでは、子どもたち自身でボールを投げるか、靴を飛ばすかを考えている姿がありました。また、午後に担当したおにごっこでも、私からの遊びの提案でたいしょうというゲームをしましたが、他施設の児童が自分の施設でみんなと一緒にやりたいと言っていて、遊びを通して子どもたちにも新しい体験につながったように感じました。

今年度、研究会に参加させていただき、研究活動や、行事への参加など、様々な学びを得られました。この学びを、次年度にも生かしていきたいと思えます。

1年間の振り返り

今池こどもの家 山田夢果

地域の子ども研究会目的『地域の子どもたちと共に成長しよう』
年間テーマ『**地域に踏み出す一歩目を～今と未来に子ども笑顔を～**』

地域の子ども研究会に携わり早くも6年が過ぎました。今年度の研究会の年間テーマは『**地域に踏み出す一歩目を～今と未来に子ども笑顔を～**』でした。

これまでは、私たち職員がどのようにすれば一歩地域に踏み出せるのか、自施設に居ながらも地域の子どもに目を向ける難しさ等を共有する機会が多かったです。そのため、加盟施設のみが集まり開催される行事等は、「交流」は図れているものの、地域に踏み出す一歩という観点での達成はできていないように感じていました。しかし、昨年度から、子ども視点で考えた時、様々な地域から集って開催されているというのに、本当にそれは達成できていないのかと疑問に思うようになりました。

地域の子ども研究会の開催会場は持ち回りです。そのためあらゆる地域に出向きます。土地勘のない私は、会場施設に着くまで不安がありました。区の名前さえもあやふやだった1年目の時に比べれば少しはスムーズにたどり着けるようになってきました。また、最近は必須だった地図アプリ、電車アプリを使用せずに会場施設や今池こどもの家にたどり着けるのか挑戦もしています。

このような自らの経験を重ねながら年間テーマを定めていくなかで、不安は挑戦するための必要なスパイスでもあることを体感すると同時に、施設の子どもたちにとっての「地域に踏み出す一歩」を今年度は少し視点を変えながら取り組めるよう努めました。

具体的には、行事時の名札に施設と氏名に加えて自施設のある区を記入したり、ドッジボール大会では「にしのえ(西成区×住之江区)」といったように区別でチームを組んだりして、それぞれの地域に触れあえる機会を設けました。また、ともだちフェスティバルで行われた借り物競争では「なにわ区の人」等のお題を入れていただいたことで、行事の繋がりを感しました。実際、参加者(子ども・保護者・職員等)から「あべなにとってどこどこ?」「浪速区にある学童はどこや~!」「阿倍野区知ってる」等々生身の声が聴けたことで、少しでも子どもたち自身が地域に踏み出している実感を持てたのではないかと思います。

今の「**なんかきいたことある**」、たったそれだけが、それぞれの自信や踏み出す一歩、原動力となり、未来の子どもたちの笑顔が増えることを信じています。そのためには、この大地協での交流や行事の場は必要不可欠だと思っています。今後も、今ある子どもや地域の現状を研究しながら、子どもたちとともに成長できるよう楽しみながら努めていきたいです。

1年間の振り返り

長居子どもの家 横山奈津美

今年の研究会では年間を通して様々な行事や研究を行ってきました。

今年の年間テーマが「地域に踏み出す一歩目を～今と未来に子どもの笑顔を～」を元に行事などを考えてきました。ともだちフェスティバルでは普段あまり輝いていない子が輝ける場所としていろいろ考え、今までと少し変わり体育館全体を使い落ち着いて遊べるフリースペースがありダンボール工作ではたくさん子どもたちが来てくれました。自由に使いたいただけ使っている事にしていたのですがあまり豪快に使う子はいなかったので次回も工作コーナーがあればいいなと思います。

ドッジボール大会では施設対抗で行い、午後からはいろいろな地域がある事を子どもたちに知っても貰うことを目的に地域別でチームを組み戦いました。その中で子どもたち同士他施設の子と仲良くなり作戦会議をする姿が見られ子ども達にとっても良い大会でした。終わってからも「あの子とまた一緒にドッジしたい」という声も聞いたのもっと地域とのつながる機会を増やしてあげたいなと思いました。

毎年地域という言葉が年間のテーマに入れていたのですが、中々地域を巻き込んだ事が出来ていませんでした。しかし、今年ともだちフェスティバルの一週後に、同じ内容で内容を減らし晴明丘中央公園でもティバルを行うことができました。地域の方から「こんなイベントで自由に工作をさせてくれて普段家だと制限することが多いのでまた機会があればやってほしい」という声などもあがり、普段地域の方と話す機会はなかなかないので良いイベントになったと思います。来年度以降も、指導員の負担が大きくなるようにだけ気を付け、継続できたらいいなと思います。

この一年間は行事の取り組みの中で子どもたちと一緒にいろいろなことを考えながら一緒に取り組んできました。その中でも子どもたちから出る意見は、大人が想像できないような発想がたくさんあり、驚きました。子どもたちの創造力や力は無限であることを改めて知ったので、来年度の行事でも子どもたちと一緒に考え、子どもたちの“やりたい”を広げていきたいと思います。

2024 年度 地域の子ども研究会 参加施設一覧

施設名	郵便番号	住所	電話番号
愛染橋児童館 学童クラブ	556-0006	浪速区日本橋東 2丁目9-11	06-6632-5640
阿さひ保育園 つくし会	545-0051	阿倍野区旭町 3丁目1-6	06-6631-4718
育徳園 子どもの家	545-0021	阿倍野区阪南町 5丁目15-28	080-4405-4337
今池こどもの家	557-0016	西成区花園北 2丁目16-26	06-6632-7020
今川学園 子どもの家	546-0003	東住吉区今川 3丁目5-8	06-6713-0277
長居こどもの家	558-0004	住吉区长居東 4丁目11-16	06-6691-3669
望之門学童クラブ	545-0041	阿倍野区共立通 1丁目9-24	06-6651-5007
平和の子 こどもの家	535-0022	旭区新森 7丁目1-5	06-6954-0524
やまと保育園 こどもの家	559-0014	住之江区北島 3丁目17-1	06-6682-1746

発行

2025年3月31日

特定非営利活動法人
大阪市地域福祉施設協議会